

「子どもの生命性と有能性を育てる教育への提言」

矢野 智司

1. 教育問題への私たちの挑戦

こんにちは。矢野です。教育実践コラボレーション・センターが立ち上げられました。今日は、簡単に本センターが目指している教育と実践のイメージについて話したいと思います。

まず私たちがどうしてセンターを企画したかということについて述べたいと思います。毎日のように、ジャーナリズムが「教育問題」を取り上げています。そのとき、例えば、いじめの事件が起きると、いじめこそが「教育問題」の中心とばかりに書き立てるのですが、そう思っていると、次の日にはまた別の「教育問題」を出してくる。別にいじめが解決したわけでもないのに、最近では「クレマーの親」が話題になっている。何も問題は解決されないうちに、次から次へと教育の話題だけは移ってゆく。でも実際の現場では、一つ一つが未解決のままで、現場の先生は問題に向かい合っているのだと思います。

ジャーナリズムがいじめを取り上げると、いじめを根絶しなきゃならない、となってしまうわけですが、しかし、「いじめ根絶のための教育」というのは、とても変です。本来、教育の中でいじめをどう解消してゆくのかというのが本筋で、それを反転させて、病理をなくすために教育をするというのは、思考法としては転倒しているのだと思います。しかも、問題を個々に取り上げて、その問題に向けて教育を組織化していくというのは、子どもにとっても大変に不幸なこともあります。私たちは、教育の原点に戻って教育問題を捉えていくべきではないかと考えたわけです。

2. 生命性と有能性：二つの教育課題

それでは、教育学研究科として、どのように教育を考えればよいのか。教育にはさまざまな考えがありまじし、厳密に考えれば、これから提案することにもいろいろ問題点はあるのですが、一番根本として教育をこのように考えたらどうかというのが、資料3（本報告書3頁）の図1です。今日の会のポスターの真ん中あたりに、地球ゴマみたいな図がありますが、それはこの図からとっています。

図を見ながら聞いていただきたいのですが、二つ矢印があります。上を向いた矢印に「知性」、下を向いた矢印に「生命」と書いています。このようなイメージで教育を考えていこうと思いました。人間の教育というものを考えると、どこまでも高く能力を向上させてゆく、そういう上昇的なイメージというのはとてもいいのだと思います。子どもはさまざまな力を発達させていくべきですし、それを支援し実現していくのが教育の使命です。これは、学校でおこなってきたような、社会的な有能性を高めていくというイメージです。「高める」というのは、教育の中でよく使われる語で

すが、上向するという空間イメージとしてもとてもよいのだと思います。

ところが、実際に教育の現場ではもう一つ別の教育がおこなわれてもいます。あまり言葉にされることがないのですが下部の「生命性」を深める教育というものです。人間は、社会的な有能性を高めるとともに、生きたもの、生命性、自分の中にある意識を超えた知らない自分といったようなもの、知らない自分というのは自分を超えた自分だろうと思いますが、そういう、生命性をより深く深めていくことが必要なのだろうと思います。教育は、そういったものも同時に課題としているわけです。

このように教育というものの中には、この二重の課題があるのです。教育方法の先生が中心に関心をもっているのは、この上向的なものであり、そして、臨床教育の先生方が関心を持たれているのは下降の方、生命性の部分だと思います。

幼児教育では、遊びを重視することで、生まれたばかりの子どもが生きることを歓びとし、自分が生きる価値があり、楽しいという感覚をもてることをとても重視されていると思います。その遊びのときの体験が生命性につながっているのだと考えていただければよいのだと思います。最近使われる言葉で言えば、上の方の矢印に「学力」、下の方の矢印に「生きる力」を入れていくことも可能かもしれません。

3. 木の高さに対応する根の深さ

もともとこの図を考えたとき木をイメージしていたので、木を喩えにして語ってみたいと思います。上の方が木の幹や葉っぱの部分です。そして下の方が根っここの部分です。地上に出ている部分は目に見えます。どんどんと伸びていくのが目に見えて、それは測定することもできるし、評価することもできる。わかりやすいですし、先生にとっても、この子はこれだけできるようになったという具体性につながるのだと思うのです。

もう一方の根っこの方はどうでしょうか。根っこは目に見えないし、だからどれほど深まっているのか、あるいは弱っているのか気がつかない。このように、「生命性」の教育というのは、実際には学校のなかでもやっているのですが、それがどれぐらい実現されてきたのかわからない、そういうことがあります。

そうすると、地上部の目に見える部分だけが元気で、根が枯れているということがあります。上だけが元気なように見えていても、ある一定以上は成長できないということになってしまいます。

もう一つ、根を喩えにして教育を考えると面白いことがあります。生命はとても複雑で、もちろん学力はまた別の複雑さがあるのですが、子どもが生きることに向かおうと、死の問題とか、性の問題とかがで

てきます。それらは、「暗さ」と結びついているのだろうと思います。根は暗いところにある。地中は暗く、地上のような明るさと違う影や暗さのようなものとつながっているのです。

さらにもう一つ、木の喩えを使って言いますと、木の幹は根と方向が逆に作られています。高くそびえるということが、深く根を張ることと関係していることを考えると、うまくイメージできると思います。幼児だと遊びを通して生命性に触れることができますが、私たちは、幼児の遊びのように即時的に生命に触れる道とは別に、文化という道を通じて、もっと深く生命に触れることができるのです。言葉もその文化の一つです。例えば、宮沢賢治の文学を深く理解することを通して、自然との交感をより深く実現することができます。死、性、暴力といった危険なものを直接体験することではなく、文化というものを通して、安全にしかもより深く生命に触れていくといえるのだと思います。そう考えると、発達という上に向かう力が、より深く生命的なものを、地深く根を張ることを実現するのだと言えます。

このことを、反対に言い直すこともできます。例えば賢治の作品では、「風の又三郎」がそうであるように、「風」というのはとても大切な言葉ですが、実際に、風と戯れ合って遊んだことのない子どもにとっては、そういう作品を読ませて心からは分からない。身体を通して自然と交歓し、言葉以前の生命世界に触れることがなければ、地に着いた生きた言葉にはならないのです。そのように考えると、この二つの方向への力、上にどこまでも高く伸びていく力と、そして下にどこまでも深めていく力とは、お互いに支えあっているのだと言えます。言い直せば、「学力」は「生命力」を必要としているし、「生命力」は「学力」を必要としている、と言えるのだと思います。

ただ、お互いを否定することも起こります。矢印の方向を反対方向にしている理由は、単純に二つがつながるわけではないということです。例えば、臨床心理士が生命のほうに子どもを向かわせようとする。学校の先生には、それが否定的なものに映るときがあります。逆もまた然りです。ここでは、お互いの見ている子どもの姿に違いがある。けれど、私たちは、そういう子どもの姿をトータルに捉えたいと考えています。要するに、木というものに、幹のみでなく、根っこのみでなく、トータルに向かい合いたいというのが、私たちの出発点です。

これまで、私たち研究者は互いに協力して教育をトータルに捉えることができずにきました。もちろんお互いが、専門家として立つためには、それぞれの領域で能力を高めていくというのは不可欠なのです。それはそれで否定できない。けれども、学問領域にしがたって分担したまま、お互いがばらばらに向かい合っている限り、木は一本の全体であるのに、その全体を高めたいとお互いは思っているのに、ばらばらに向かい合っているというのは、木にとって、つまり子どもにとってもよくないですし、私たちの学問にとってもそれは、部分的で偏ったものになってしまうと思うのです。それで私たちは、チームを組んで、木の全体に

向かい合いたいと思いました。

木は一本で成り立っているわけではないですから、森を見るのに長けた専門家に入ってもらうことはとても大事です。教育行政や教育社会学の研究者ですね。教育方法学や発達心理や臨床の研究者とは異なる次元で問題を捉え直していきます。個人のレベルでなくて、学校の仕組みや制度を少し変えるだけで、全体の動きが変わっていきます。このようにチームで力を合わせて改善していくことが、とても重要になるのです。分野を超えた専門家のチームであることが、コラボレーションの重要な点なのだろうと思います。

4. コラボレーション・センターの仕事

今述べたようなことは、これまでも言われてきたことです。それが現実にごういう形で、コラボレーション・センターという形で実現できた理由は、それぞれの研究者が現場に入って、それぞれ個々の取り組みをしてきたなかで、他の分野の専門家も巻き込んでいけたらどんなに力強いだろう、と互いに考えるようになってきたからです。

「教育問題は私たちにお任せください」と言いたいのですが、教育問題の解決はそう簡単ではない。実は何か解決できるかはまったくわからない。そもそも、全てのことが自分の思うようになったらどうなのだろう。自分の子どもが自分の思い通りになったらと思うと少し怖いですね。教育は、自分で思考し、意思する人間を育てたいわけですから。それでも、解決できることはいくつかあると思います。

このプロジェクトは5年間ということになっていますが、5年たったらおしまいとは思っていません。長いスパンで、教育の改善に関わっていきたくて考えています。そしてこの5年間だけでも、何らかの形で、子どもの有能性と生命性を高めるために、支援ができると思います。支援の中で、子どもたちが変わるのが一番の目的ですが、私たち自身も変わるだろうと思っています。それと同時に、現場の先生も、コラボするので、変わらざるをえないのだろうと思います。さらにこのプロジェクトには大学院生も参加します。彼らは、将来教員養成系の大学の教師になります。こういった人たちが、現場の中でもものを考え、未来の教師を育てていく。

このように教育改革は、長いスパンで捉え、質の高い教員養成系の大学教師を育てることも見据えながら、本センターは関わっていきたくて考えています。目に見える形で改善がなくとも、じわりじわりと着実に全体の教育力が上がることで、日本の教育をこの京都から変えていきたいと思っています。